

## 「戦争と聖書」①

菊田行佳

「角笛が鳴り渡ると、民は関の声をあげた。民が角笛の音を聞いて、一斉に関の声をあげると、城壁が崩れ落ち、民はそれぞれ、その場から町に突入し、この町を占領した。彼らは、男も女も、若者も老人も、また牛、羊、ろばに至るまで町にあるものはことごとく剣にかけて滅ぼし尽くした。」（ヨシュア記6章20－21節）

欧米人のものの考え方を理解するためには、聖書を理解することは欠かせないことだと、ここで何度か述べさせて頂きました。それなら、欧米人がどうしてこうも好戦的なのかの原因が、聖書の中にあるはずだと考えることも成り立つのだと言えるでしょう。と言いますのも、20世紀に起こった二つの世界大戦では、いずれもヨーロッパの各国が中心となって引き起こされ、そして第二次世界大戦からはアメリカが大々的に参戦しているからです。もちろん東アジアの日本も参戦していますので、あながち戦争と聖書の連関だけを大きく取り上げることは、的外れかもしれませんが、ただここでは聖書が戦争を肯定してしまう国民性を形成する要素を持っているということを確認して、そして同時にその問題性を克服する手段も、聖書の中に存在していることを、述べてみたいと思います。

聖書の中に、戦争の記述がたくさんあることは事実です。そしてその戦争を、「万軍の主」として、「戦いの神」が導いていることも、確かに書かれています。冒頭の聖書箇所挙げたヨシュア記というところでは、神の命令を受けたヨシュアという指導者が、軍隊を率いてエリコ（世界最古の都市）の町を制圧して、その住民や家畜をすべて殲滅したという恐ろしいことが記されています。このような情景は、日本においては原爆や空襲によってすべて焼き野原にされた情景と重なっていると思います。軍人、民間人、小さい子どもや老人などを識別することなく、すべて無差別に滅ぼしてしまう戦争のあり方です。もし、自国民と同じ人間だという視点が少しでもあれば、このような凄惨な行動は出来なかったでしょう。ヨシュアの時代から変わらずに、自国民の命を守り、そして自国民の利益を優先することと引き替えに、他国民の命を奪い、犠牲にするというのが、戦争の本質なわけです。残念ながら、聖書にはそのような自国民だけを守って保護し、他国民を同じ人間として扱わないという記述が、確かにあるのです。ですから、聖書から伝統的な価値観を形成してきた欧米人が、そのような一国主義・一族主義に立って、他国民を殲滅してしまうという暴虐を聖書のこのような箇所から、神による正当性を主張してしまうようなことが起こって来たことも、認めなくてははいけないことです。他国民への暴力、侵略を認めようとしないと批判されるのは、何も日本人だけではなく、キリスト教徒が比較的多くて聖書にも親しんだ国民が多いアメリカ人のような人々にも当てはまることです。つまり、敗戦国だけがその一国主義を反省し、侵略によって与えた多大な犠牲に対する謝罪をすれば

良いのではなく、戦勝国も同じ反省と謝罪をしなくてはならないのだということです。アメリカ人の大勢としては、いまだにこのことへの反省や謝罪がなく、ベトナムやイラクなどで戦争を繰り返しています。そのアメリカ人と反省と謝罪が不十分な日本人が結束して海外派兵が出来るような法律・制度を作ってしまうと、その先に待っていることを想像することは容易であると言えるでしょう。

かつて、他国を侵略することに正当性を与えていた冒頭の聖書箇所においても、現在はさまざまな反省的な取り組みが為されています。ヨシユアが率いていたイスラエルの民というのは、実はエリコなどの都市国家によって従属的に搾取されていた小作農の集団であり、よってこのエリコとの闘争は、自由と権利を獲得するための闘いだっただという考察です。また、ここですべてのエリコの住民や家畜を「滅ぼし尽くした」と訳されている言葉は、「聖絶」するという言葉であり、実際に皆殺しにするという意味ではなく、儀礼的な意味で言われているだけだということです。つまり、精神的な意味で一旦滅ぼし、そして、浄めたのちに、自国民と統合するという意味だということです。

もちろん、そのような視点で聖書を読み直してみても、なお、先の聖書箇所のようなところが暴力を肯定して、一民族主義に偏っていることは、変わらない事実です。ですから、聖書のある部分にはやはり、限界があるということも確かなことでもあります。そのことを認めた上で、その一国主義、一民族主義を反省して、普遍的な人類全体の平和を求め、そちらにこそ神の本当の意志があるのだと、主張する人々が聖書に登場して来ることも、合わせて紹介したいと思います。

冒頭の聖書箇所、ヨシユア記は旧約聖書にあたりますが、同じ旧約聖書の中にも、聖書の神は一国だけの神ではなく、世界すべてを統治して、すべての民族の平和を希求しているのだと考える人たちが出てきます。特に「預言者」といって、伝統的な価値観を批判して、より深い真実を神から聴き取ろうとした人々がいます。彼らは、イスラエルの平和は、他国と和解することと、そして他国民の問題性よりも、自分たち自身のあり方が間違っていないかを吟味することによって、自己変革して行くことにこそあるのだと主張致します。

「狼は小羊と共に宿り、豹は子山羊と共に伏す。子牛は若獅子と共に育ち、小さい子供がそれらを導く。牛も熊も共に草をはみ、その子らは共に伏し、獅子も牛もひとしく干し草を食らう。乳飲み子は毒蛇の穴に戯れ、幼子は蝶の巣に手を入れる。わたしの聖なる山においては、何ものも害を加えず、滅ぼすこともない。水が海を覆っているように、大地は主を知る知識で満たされる。」

これは、イザヤという預言者の言葉ですが、敵対する強者と弱者が和解して、平和に憩うビジョンが示されています。神の真意を知る知識によって、世界は敵対関係から和解と平和の世界へと変容できるのだという聖書の民の大きな願いが込められています。

今回は新約聖書に移り、引き続き「戦争と聖書」の関係を考えてみたいと思います。